石工品製造業

石材加工の伝統技能を守る

7-18 石嶽石工業有限会社

石工加工のプロフェッショナル

愛知県岡崎市は愛知県のほぼ中央に位置した都市であり、石材加工で全国トップクラスを誇っている。

また、矢作川流域に石屋の集積した石工団地があるが、その石工団地から少し離れた所に、今回取材した石嶽(いしたけ）石工業有限会社がある。

石嶽石工業有限会社の、今回取材をした楠名（くすな）康弘氏（工場長）は、祖父の代から石屋であるが、父親の楠名嶽済氏（社長）の代で総合石材業社として、今の会社を立ち上げた。

現在では、灯篭（とうろう）や墓石だけではなく、造園土木や住宅建築の塀・床などの石材加工に関するものなら、何でも全国から注文を受けている。

まさに、石材加工のプロフェッショナルである。

技能五輪選手を常に輩出する常連

これまで同社は、技能五輪の全国大会で金メダル 3、銀メダル 6、銅メダル 3、敢闘賞 3 個の実績を残している。平成 21 年には、技能五輪国際大会（カナダ大会）に山田誠徳氏が出場し、7 位入賞を果たした。

一定期間の研修期間が経過する中でハイレベルの人材育成をしつづけている。また、楠名氏自身もテレビでの競技会優勝や、第 25 回技能グランプリでも準優勝するなど、常に活躍をし続けている。

技能グランプリの様子

技能検定は若い衆を一人前に育てた証

石屋の業界では、全国の石屋の跡取りが岡崎に修行に出て腕を磨き、4 年～6 年すると地元に帰っていくという人材育成の伝統がある。そのため同社は、これまで全国から 20 名以上の若い衆（研修生）を受け入れてきた。若い衆は、昼間、職場の業務で職人から指導を受け(OJT)、夜間は 3 年課程の岡崎技術工学院で座学と実務を学ぶ。

技能検定をはじめ仕事に必要な資格等は、若い衆が研修を修了して、確実に育った証として、全員に取得をさせて帰しているそうだ。岡崎で修行をすれば技能は高まっているが、同社は、若い衆を送りだした故郷の両親に「基礎的技能が修了した証」として取得させている。同社も「修行に来た証と故郷の両親へのお土産として、技能検定合格などの資格をできるだけ持たせてやりたいです。」と語る。これには、会社の利益を超えた岡崎の伝統的な人材育成を担う者としての自負が感じられた。

検定の意義についても「技能検定は合格して当たり前。検定試験までの過程が重要と考えている。石材加工は、材料が石であり製品を作る際には失敗できない。だが、練習の時だけは失敗できる。練習で失敗をした時にどうしたらいいのかを考え、作業の確実性の向上や重要性を肌で感じて欲しい。」と検定や技能五輪によって、限られた時間の中で確実に作業する意識付けの重要性を語ってくれた。

競争環境を作り、確実に加工する技術を育成

技能検定の受検準備は、OFF-JT が中心である。修行を始めて 3 年目の若い衆たちが技能検定を受ける際に、業務後や学校で練習をしている。その受検準備をしている若い衆を 4、5 年目の先輩が指導をしている。業務も、レベルの高い高学年の若い衆とはじめたばかりの若い衆を組み合わせて行い、個々の向上心を高め合っている。

時々、高学年の若い衆と職人で同じものを作って競争をさせ、「ちょっと高くなっている鼻を折るんですよ。」とのことであった。常に競争的な環境を作りだす事で、若い衆たちに適度なプレッシャーを与えて、自分自身の技能水準を確認、向上をさせている。

石材加工の様子

石嶽石工業有限会社

- 業種：石工品製造業（石材加工・販売・施工）
- 住所：愛知県岡崎市
- 代表者：楠名嶽済
- 設立：昭和46年
- 従業員：12名＋役員2名
- 技能士：4名（伝統工芸士2名）

技能士へのインタビュー

楠名　康弘 氏 （35歳） 1級石材施工技能士（石張り作業）
伝統工芸士・職業訓練指導員

野球少年から石屋へ

楠名氏は、小さい頃から職人たちの仕事を目の当たりにし、自宅に下宿をしている若い衆たちと一緒に育った。高校では情報処理を学び、野球に没頭していた。この頃、兄も家業の石屋を継いでおり、2 人とも石材加工の業界に入る必要があるのか悩んだ。しかし、高校卒業を期に父と一緒の石屋になろうと心に決めたそうだ。

そんな楠名氏だが、石屋の DNA は確実に開花し、20 歳のときに技能五輪全国大会で労働大臣賞を受賞。テレビ東京系のテレビチャンピオン第一回「石職人選手権」で優勝、第 25 回技能グランプリで準優勝するなど確実に実績を積み重ねてきた。

現在は 1 級石材施工技能士に加えてさらに伝統工芸士であり、工場長として会社を技能・経営の両面から支えている。

石には、「削る美学」がある

石を切削する際に熱が発生するため、水で冷やしながら加工をする。その為、冬になると凍てつく寒さの中、水で冷やしながら切削・加工をする。このような厳しい環境の中でも、石と向かい合う楠名氏はじめ石工たちを惹きつける石材加工の魅力はどこにあるのだろうかと尋ねると、「石は、『削る美学』があるんですよ。」と石の魅力を語ってくれた。石は鉄などとは異なり、温度によって変形することもなく、削ることしかできない。その為、石のかたまりと対峙し、形のないものから、形のあるものへ作り出さなければならない。同じものを作ろうとしても全く同じものを作り出すことは非常に難しく、「同じ寸法でも微妙に違うのがまたいい。」とも言う。確かに、工場の周りにある石材加工品を見てみると、よく似たものであってもやはりどれも微妙に異なる。

「削る美学」とは、やり直しのきかない世界で、無から有を生み出し、個性を出す、そんな魅力を凝縮した言葉だと感じられた。

トップレベルの技能を持つ会社であり続けたい

楠名氏は、「岡崎の石工品は技能のレベルが非常に高く、そのなかでもトップレベルの会社であり続けなければならないという思いがある。」と自社の技能水準の向上へのこだわりを語る。

「技能検定や技能五輪についても自身の技能の向上がもちろん目的です。」また、学校の指導員でもある楠名氏は、「先生自身が下手だと格好がつかない。また、指導者としての自分の指導の説得力を維持するためにも、自身の技能向上は必要だと考えています。」と指導者としての技能向上の重要性を語ってくれた。

石材界の技能伝承に積極的に関与したい

今後について楠名氏は、「現在、技能検定の検定員は 60 代が多く、このため若くから指導的立場についてきた 30 代 40 代が少ない。また、岡崎技術工学院での指導者も 30 代は自分だけである。このような状況のため、技能の継承ができていない部分が多くある。自分自身が、積極的に自身の技能の向上とともに、指導を行っていきたい。」と技能継承への危機感と抱負を語ってくれた。

技能検定についても、「技能検定の出題課題自体は時代遅れな面があるが、伝統を守るという意味でも、ある程度古いものも必要であると考えている。しかし、新しい技術も重要であり、伝統と新しい技術を融合させる必要があるのではないか。」と広い視野から今後のあるべき検定像についても語ってくれた。その言葉には、業界の伝統を引き継ぐフロンティアとしての実感がこもっていた。

大型機械での加工（左）
灯篭（右）